



Title	マプーチェ歴史伝承、ラウタロ区(2) : フランシスコ・ミジャレンの語る「征服」と「平定」
Author(s)	千葉, 泉
Citation	Estudios Hispánicos. 2000, 24, p. 101-122
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/93843">https://hdl.handle.net/11094/93843</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# マプーチェ歴史伝承：ラウタロ区（2） —フランシスコ・ミジャレンの語る「征服」と「平定」—

千 葉 泉

## Testimonio histórico mapuche, comuna de Lautaro (2): “Conquista” y “Pacificación” contado por don Francisco Millalén

Izumi Chiba

### 1. 序

本稿は、チリの先住民マプーチェの歴史に関してマプーチェ自身が語った伝承の1記録である。

本稿で扱う伝承を筆者に語ってくれたのは、現在70歳になるマプーチェ男性フランシスコ・ミジャレンである。フランシスコは、チリ第9地域ラウタロ区の農村部に位置するアントニオ・ミジャレン共同体に住み、小規模な農耕と牧畜を営んでいる。

筆者は、1993年に首都サンティアゴ市で開催された2言語多文化教育に関するシンポジウムで、ラウタロ区の小学校で教鞭を取るマプーチェの教師サンティアゴ・ミジャレンと知り合った。筆者がマプーチェ語を勉強していることを喜んだサンティアゴは、自分の住む共同体を訪れるようにと誘ってくれた。数ヶ月後彼の家を訪れた筆者を、彼はマプーチェの伝統に詳しい兄の家に連れて行った。それがフランシスコであった。

それから3年近くが過ぎた1996年8月のある日、またいろいろ話を聞かせてもらおうとフランシスコの家を訪れた。そして、筆者が正式な名前と年齢を尋ねると、彼は自分や自分の父母、祖父母の名前を告げた後、自分からある歴史伝承をマプーチェ語で語り始めた。それは、スペイン人の

「征服」やチリ政府による「平定」に関するものであった。

16世紀中葉にスペイン人が到来した際、チリ南部に居住していたマプーチェは異民族の征服と植民の意図に激しく抵抗し、17世紀の初頭にビオビオ川以南の地域について事実上の独立を回復する。以後、植民地社会および19世紀初頭の独立以降のチリ・イスパノクリオーリョ社会から様々な政治・軍事的介入や文化的影響を受けながらも、19世紀後半に到るまで自律的な存在を保持することに成功した。

しかしそのマプーチェも、19世紀の後半には農牧産品輸出の振興と「国家統合」をめざすチリ政府が遂行した「アラウカニアの平定」とよばれる軍事行動によって共和国の法制に従属させられる。その結果、彼らの領有地の90%以上は国有地として剥奪され、「進歩と近代化」を促進するべく導入されたヨーロッパ人やチリ人の移民に分配されたり、競売にかけられたりした。<sup>2</sup>その一方で、マプーチェたちは少数の家族ごとに極めて狭い共同体を割り当てられ、今日まで貧困な生活を強いられてきた。<sup>3</sup>

ところで、「征服」以降のマプーチェ社会に関して残されている資料の圧倒的多数は、彼らが「ウインカ winka」と呼ぶよそ者(ヨーロッパ系)の記録者がスペイン語で書き残した文書である。また、これまで「征服」や「平定」などの歴史的出来事について様々な立場から歴史研究が行われてきたが、やはりその大半は主にこうした「勝者」の書き残した文献に依拠して進められてきた。<sup>4</sup>

しかし、今日のマプーチェたちの口から、ウインカ研究者の手によるこの種の「マプーチェ史」が「自分たちの認識を反映しない」、「偏見や偽りに満ちている」といった否定的な意見を聞くことが少なくない。またそれに比例して、共同体や家族のレベルにおいて「口頭で伝えられてきた伝承」こそ「自分たちの真の歴史」であるという意識も強い。

近年アラウカニアの各地で土地回復闘争が隆盛しているが、こうした運動を主導するマプーチェの中には大学などの高等教育まで受けた者も少なくない。だが、こうした「知識人」マプーチェの間でも、出身地区に関する伝承が彼らの行動に倫理的「正当性」を付与する根拠として機能している。

こうした口伝承は、マプーチェの歴史を研究する上でどのような価値があるだろうか。

まず、これまでウインカ記録者が残してきた文書には書かれてこなかつ

た新しい「事実」、特にマプーチェ側の状況に関する「事実」に関する情報がこれらの伝承には含まれている。とりわけ「平定」は、現在の年輩マプーチェの祖父母の世代の出来事であるため、当時の一族の動勢に関する具体性の高い情報を伝承する人物は各地に残っている。

だが一方で、これらの伝承が「実際に起こった出来事」という意味での「客観的な事実」のみを伝えるわけではない。伝承の過程で一部の情報が忘却されたり、単純化されることもあるだろう。複数の情報が混同されることもあるだろう。また、読み書きを修得した人物の「語り」の中には、口伝の情報に文書から得た情報が混入している可能性もある。さらに、語り手が何らかの意図に応じて「創造」、あるいは「整理」した情報が含まれていることもありうる。つまり、伝承者が無意識的、あるいは意識的に「操作」した部分もこれらの伝承の中には含まれている可能性があるといえる。特に征服期や植民地時代など古い時期の出来事に関する情報の場合はこうした傾向が強い。

だがまさにそうした部分も、現在マプーチェとして生きる「語り手」が自民族の歴史をどのように認識しているのか、あるいはこれを他者にどういう形で伝えたいのかというメッセージを含むがゆえに、また別の価値を備えているといえる。

以上から、マプーチェの歴史に関するマプーチェ自身の認識を反映する情報を書き残しておくという意味で、そして現代のマプーチェの行動を支える意識の一端を明らかにするという意味で、こうした歴史伝承を記録することは有意義な作業であると考えられる。本稿は、このような問題意識に基づいて記録した歴史伝承の一例である。<sup>5</sup>

## 2. フランシスコ・ミジャレンの証言の特徴

フランシスコの父方祖父アントニオ・ミジャレン・カルブーコは、今から120～30年ほど前、実際に「平定」戦争を戦い、後に同名の共同体の創始者となった人物である。フランシスコの証言は、主にこの父方祖父の妻であった祖母カルメリータ・モントレヤその息子である父親から聞いた伝承に依拠している。

以下に呈示した内容は、彼が1996年8月3日に語った証言、および1999

年9月3日に再び彼の自宅を訪れた筆者に2度に分けて語った証言からの抜粋である。これらを便宜上〈証言1〉、〈証言2〉、〈証言3〉と名付け、それぞれの特徴を考察しておこう。

〈証言1〉は、16世紀中葉のスペイン人による「征服」に際してマプーチェたちが取った対応が主な内容となっている。

まずフランシスコは、征服者が到来するよりも前に、すでに当時の「偉大なマプーチェたち」が「夢 *peuma*」を通じて彼らの到来とその目的を察知していたと語る。この点は、16世紀中葉当時スペイン人の記録者たちが書き残した文書では言及されていない。

「夢」は今日でも多くのマプーチェによって、神格や先祖の霊が未来の出来事を予言したり、果たすべき義務を伝達するための「聖なる手段」と見なされ、夢の内容に従ってさまざまな行動が取られることが珍しくない。<sup>6</sup>

次にフランシスコは、祖先たちが征服者に対して始めから徹底抗戦を挑んだことを称揚する。彼らの抵抗があったからこそ今日までマプーチェ民族の存続が可能になった、と。

またこの点に関連して、彼らが「和平交渉」を行わなかったことも積極的に評価されている。「文書 *papel*」, 「著名 *firma*」といった、ウインカ社会において「合法的契約」を象徴する要素、あるいはこれら的手段を通じて行われる「和平」というものに対して、「騙すための方便」という否定的な含蓄が付与されているからである。こうした「和平」に対する不信感は、後述するように、19世紀後半に遂行された「平定」に関するマプーチェ独自の否定的認識を反映している。

最後にフランシスコは、こうした「祖先たちの偉業」を伝える「歴史」を今日の若いマプーチェたちが忘却していること嘆き、民族の結末のためにも伝承の保持が重要であることを説く。

以上、「夢」という伝統的な要素に従い、「和平」を求めることなく征服者に敢然と闘ったという内容は、征服期の祖先たちを「民族自立保持のために闘った偉大な英雄」という純化されたイメージで伝えている。

こうした「偉大な祖先たちの輝かしい闘い」という認識は、現代のマプーチェの民族的アイデンティティを支える最も重要な要素の一つを構成している。と同時にこうした祖先像は、支配社会に従属して多大な影響を受容している現在のマプーチェの在り方を反省し、伝統への回帰を喚起する

ための教訓としても機能している。

なおこの証言の範囲内では、特にミジャレン一族の先祖に関する具体的な情報は見られない。具体名を伴う形で現れる「先祖 kuifike che」はラウタロ、カウポリカン、ガルバリーノの3名だが、これらはいずれも征服初期に活躍した人物で、今日のマプーチェが共通して敬愛するいわば「民族全体」の英雄である。<sup>7</sup>

次に<証言2>は、「征服」から「平定」に到る時期の、やはりマプーチェ民族一般の状況に関わる説明が内容の大半を占める。

第1に興味を引くのは、マプーチェたちが「スペイン人の到来以来350年間にわたって戦い続けた」という指摘である。

この指摘に従えば、ラウタロを始めとする英雄たちが活躍した16世紀中葉の「スペイン人による征服」の時期から、19世紀末の「チリ人による平定」の時期まで、異民族の支配に対してマプーチェたちが抵抗の闘いを不断に持続したことになる。

こうした「連続闘争」的認識は、1980年代からチリの歴史家セルヒオ・ビジャロボスを中心に隆盛した「フロンティア関係」を強調する研究潮流<sup>8</sup>とは真っ向から対立するものである。この潮流によれば、マプーチェ社会とウィンカ社会の間で、17世紀の後半からは戦闘よりも和平交渉の制度化、交易や布教活動の活性化など、さまざまな分野でむしろ「平和的」な交流が優勢となり、「平定」以前の段階でマプーチェ社会のチリ共和国への「統合」はかなり進展していたとされる。

だがフランシスコの証言では、マプーチェが連続的な「抵抗」を維持したと示唆することによって、「平定」前のマプーチェ社会の「自立的」性格が強調されている。また、「平定」前のウィンカ社会の態度に関して、これが本質的には共存をめざす「平和的」なものであったわけではなく、他者支配を望む者のそれであったという認識を読みとることも可能であろう。

第2に、この点にも関連するが、イエズス会の神父たちの助力で実現したという和平に関する説明の中にも興味深い特徴が見い出せる。

フランシスコは、ビオビオ川を境界として互いに相手の領域を侵犯しないという「和平」の合意が交わされた次第を詳しく語っている。

これは一見、1641年に当時スペインの植民地であったチリの総督バイデスの侯爵とアラウカニーアの広範な地域の諸集団との間で実現した、有名

な「キジンの和平」に言及しているように見える。<sup>9</sup>

ミジャレン一族が「平定」当時に住んでいたのはキジンの南西に隣接するペルケンコの地であった。したがって、かつてこの近隣の地で行われた重要な和平に関する伝承が、一族の間で伝えられてきたとしても不思議はなからう。

だが興味深いことに、フランシスコはこの「和平」を、チリ軍が19世紀末に遂行した「アラウカニアの平定」を指すスペイン語の“Pacificación de (la) Araucanía”という語句で表現している。また「350年間戦った」後にこの和平に応じたという指摘も、このことと矛盾しない。

つまり、いわゆる「史実」によれば17世紀の中葉に行われたはずの「キジンの和平」が、19世の末にあたる「平定」期の出来事として認識されているのである。一見「時代錯誤」と見えるこうしたフランシスコの説明は、何を示唆しているのだろうか。

まず、植民地時代のスペイン人当局ではなく、他ならぬチリ共和国の当局者たちとの間で「初めて」こうした境界線が正式に設定されたということになるため、ビオビオ川という境界の「現代的」正当性、言い換えればマプーチェによるビオビオ川以南の地域に対する領有権の「現代的」正当性が際立つことになる。

同時に、それにも関わらず、そのチリ当局者たちがこの「和平」に「つけ込んで」マプーチェ領域内に「集落」を建て始めたこと、そしてそれ故にマプーチェたちが土地剥奪の危険を察知して戦闘に立ち上がった旨が説明されている。もちろん、こうした危惧が現実のものとなったことは言うまでもない。

つまり、「平定」という表現に、ウインカによる「マプーチェの土地剥奪を目的とした偽りの和平」といった特別な含蓄が込められているのである。言い換えれば、ウインカたちが「国家」の「近代化」を促進するために「合法的」に行ったとする「平定」という行為は、自分たちマプーチェを欺く形で行われたのだという認識を示唆している。<sup>10</sup>こうした認識は、今日土地回復闘争を推進するマプーチェたちの意識の根底にも流れている。

そして最後にフランシスコは、再び現代のマプーチェの若者たちによる歴史伝承の忘却に触れ、こうした伝承の継承による民族の団結と土地回復の期待を述べ、現在のマプーチェの貧困状況を嘆く。

以上〈証言1〉および〈証言2〉は、「征服」や「平定」に際してのマプーチェ民族「一般」の対応を、独自の認識に基づいて説明したという性格が強いといえる。

それに対し〈証言3〉の内容は、〈証言1〉、〈証言2〉とは対照的に「平定」当時のミジャレン一族の具体的な動勢である。そしてその主な情報源は、「平定」を実際に経験した祖母である。したがって、前二者よりも、いわゆる「事実」にあたる情報を赤裸々に伝えたという性格が強いと思われる。

ミジャレン一族の名は従来の「平定」史には登場しない。<sup>11</sup>だが、フランシスコの証言によれば、同一族が最後まで「平定」に抵抗する立場に立ったものと思われる。

フランシスコの祖父の母親姓カルブーコ、そして祖母の父親姓モントレはいずれも、「アラウカニアの平定」に最も強硬に抵抗した集団「ウェンテチェ wenteche」に属する代表的なリーダーのそれであり、従来の「平定史」にもしばしば登場する。<sup>12</sup>

一方、フランシスコの証言によれば、ミジャレン一族の本来の居住地はモントレ一族と同じペルケンコであった。こうした血縁上や地縁上のつながりからミジャレン一族も「平定」に対する抵抗の戦いに積極的に参加したのだろう。

まずフランシスコは当時のウィンカ軍との戦闘に言及する。祖父が率いるマプーチェ戦士団が勇敢に戦闘に挑み、倒した敵の血をすすって<sup>13</sup>餓えをしのいだ様子、自衛のために一族が団体で行動していた様子など、当時の情勢に関する生々しい説明が続く。

次に、南下して来たチリ軍の圧力によってペルケンコの地を追われたミジャレン一族の放浪の様子が語られる。<sup>14</sup>

それによれば、ミジャレン一族はまず当時無人の原野であった今日のヘネラル・ロペス駅近辺の地に移住したのち、さらなるウィンカ軍の南下とともに現在彼らが住むラウタロに到来し、同地で「定住委員会」による土地の割り当てを受け、今日フランシスコたちが住む共同体が誕生した。また、迫害を恐れた祖父のアルゼンチンへの逃亡のエピソードも付け加えられている。この説明から、「平定」戦争の混乱によって故郷を追われ、他の地域に「定住」することになった者もいたことがわかる。



このように<証言3>には、直系の子孫であるがゆえに語り継いでこられたのであろう、激動の「平定」期における一族の具体的な動勢に関する情報が盛り込まれている。

### 3. 証言の言語上の特徴

フランシスコが少年の頃、家で年長者たちは皆マプーチェ語で話をしてきた。だが、ウインカの知人が家に訪れたり、集落を訪問した際には彼らもスペイン語で話していたため、自分も自然とスペイン語も習得したとフランシスコはいう。

いずれの証言の際にも筆者はマプーチェ語で質問を行っているが、2言語を操るフランシスコはマプーチェ語の他に、証言の一部をスペイン語で語っている。また、マプーチェ語で語られている部分の中にも、名詞、動詞語根、接続詞、副詞等のレベルで多くのスペイン語が混入している。

紙面の都合上ここで社会言語的な分析を行う余裕はないが、読者の便宜上、以下の原語による証言のうちスペイン語で発せられている部分、および対訳のそれに対応する部分に下線を付すことにする。

### 4. フランシスコ・ミジャレンの証言 (Testimonio de don Francisco Millalén)

#### < Testimonio 1 > Chumngechi ta ñi akun pu español (“Conquista”)

Kuifi kai ka petu akuno chi pu winka “español” pingelu, tüfa, tüfachi mapu meu, Chile pingerkei fantepu, mülekerkefui ta fütake lonko. Lonko. Fei ta lonko ta fei ta trawüluukefuingün. Fei ta kimkarkefuingün ta ñi akual ta pu winka, ka tripa che. “Ka tripa che” pingei ta ti.

Pu winka akual, petu kimngelai. Kuifi fütake che kimlafi ta akual ta ka tripa che.

Pero peuma mu ta nüükülekerkeingün ta ti. Peuma meu. Sueño. Peuma meu nüükülekeingün akual ta winka. Femi ta fütake mapuche. Peumatufi. Fei ta “Akuai ta winka, ka tripa che.” Fei ta “Weichapaeiñmu.” pirkerkefui ka.

Weichapafi. Küme akulaingün ka. Kümekapalafi ta mapuche. Araucano ka

pingei ka. Fei ta kúmekapalafingün. Fei ta weichapafingün.

Bueno, también kiñeke mu ka kúmekai weichan. Porque si no doi ngüenkangepelaafuiñ piketuiñ ka. Doi ngüenkangeafuiñ ka. Kisu engün kai kimwinkadungulu, papel ka chillkatuingün, fei ta “Tüfa tukuaimi ta mi firma. Weniyewaiñ.” pile, doi wesakunurkeafuiñ ta ti.

Fei mu lle mai, fütake che fei, fei puwi, fei ngütamkawi, tukulpai. Fei ta “Famechi akuai winka. Mejor weichaafiiñ kai. Chunten puwün puwaiñ.” pirkeingün fütake che yem. Lautaro, Galvarino, Caupolicán, fei fütake lonko ka. Fei ta llükalafingün ta pu español ka. Llükalafingün, fei ta weichafingün ka. “Chunte puwüñ chi, puwün” piai. Femnole kai, ngelaafuiñ fantepu iñchiñ ñi mapuche tüfachi mapu meu. Ngelaafuiñ.

Fütake mapuche fei lai engün lle mai. Fantepu petu tuk... Ka kiñeke mapuche kai ka ngulletui femechi weichan ta fütake lonko yem. Itrokom ka mapuche nga domoñmau tukulpanefule tüfachi dungu, fütake dungu rupalu, weichan dungu, doi kúme uniükülepelaafui pu mapuche ngen. Fantepu ta winka rume wesa ngüenkaeiñmu. Müte kúmelelaiñ tüfa mu tüfachi mapu mu ta ti. (…)

### < Testimonio 2 > “Pacificación de la Araucanía”

Claro que después los españoles llegaron, “la Conquista”, y de tantos ..., trescientos y cincuenta años pelearon según lo que decían los antiguos, mi padre, la abuela. Después de tanto pelear lo españolé nunca pudieron convencer a los mapuches. No se le dio por vencíu. Que alguna vez está bien.

Entonces después de tantas peleas, entonces ya trajeron los curas jesuitas de una manera de convencer a los mapuches. Entonces dijeron que, “Mejor, hemos peleado hartu. Han perdido mucha gente tanto winka como mapuche. Langümkawiiñ. Fei chumafuiñ kai? Deu eimün kimtukunieimün ta müm mapu. Rume ayinieimün ta mapu. Feu mu nga kewaimün. Fei mu nga weichaimün”, pirkei ta fütake winka general. “Mejor weniyeutuain. Familiayeutuawaiñ”, pirkeingün ka.

Fei mu nga fütake lonko kiñeke fei pi, “Kúmekapelafui. Femuliiñ ... Doi fütä weulaafiiñ tüfachi pu winka. Nieingün nga tralka. Nieingün itrokom.

Pütrün che nga lai. Pichike che, domo, itrokom nga lai feichi weichan meu.” piwürkeingün fütake lonko.

“Kiñe ina mejor. Deumaaiñ kiñe acuerdo.” pirkei nga pu winka. Akui nga padre jesuísta. “Kümelai ta mün langümkamekewün. Fente, mejor tüngai nga weichan.”

“Niele nga deya” pirkei fütake general, capitán, itrocom weichakelu mapuche engün. “Pilaimün ta mün nga eluwal eimün.” pirkei nga general.

Mapuche nga eluulai nga ñi weungeal. “Chunte puuliñ chunte puwaiñ. Itrokom ta lalayaiñ ta ti tüfachi weichan meu.” pirkei nga fütake che.

“Afkentu kewaiñ. Fei kutrankawiiñ. Chumafuiñ kai? “Bueno, mejor nga tüfachi pu winka küme eluwaiñ. Mejor, familia yeutuwaiñ.” pirkei nga general<sup>15</sup> [pu lonko?].

Fei “Itrokom nga ... Fei ta “kümekapelaafui.” pi nga kiñeke mapuche. Ka mapuche kai “Koila peno, tüfachi pu winka rume ngünen nierkei. Weulaafiñ nga ngünen mu.” pirkei nga fütake che yem. Domoñmau.

“Bueno, chumafuiñ kai? Ngünechen<sup>16</sup> peno akui tüfachi pu ka che. Fei ta weulaaimün ta ti. Tüfa mejor weni yeutuaiñ, familia yeutuaiñ.” pirkeingün. “Iñche nga nien nga deya. Mülei nga wentru, wecheke che. Mülei nga üllchake domo. Welu, mejor.” pirkei nga fütake che. “Welu ke nga reutuain, familia yeutuwaiñ.” pirkeingün fütake general.

Fei mu nga mülei nga “Pacificación” ti Araucanía. Elingün papel ka. Mülewei ta historia ta ti. Historia mülei. Universidad kimniei. Kom tüfachi fütake dungu. Koila dungu no. Rüf dungu ta ti.

Rume fütä ..., küla pataka kechu mari tripantu meke..., weichaingün fütake che. Weungelaingün. Weungelaingün. Fütake lonko kai después nga laingün. Itrokom. Fei ta ngelai ...

“Fei lonko ñi ñawe, lonko ñi fotüm edukaafiñ. Re falte nga mülelai universidad, itrokom.” pirkefui nga fütake generales. Mülefui nga ti jesuísta padre.

Pero inalaingün. Ngelai ta ñi inkayal. Fütake che kom laingün. Wecheke che kai müte feyentulai. Fei mu nga fantepu küpai, akui nga winka.

“Felele”, pirkei nga fütake che, “Ya. Mejor nga repartiaiñ nga mapu. Deu

akuimün ta ti. Chumafuiñ kai. Weichaiñ. Langümüwiiñ epüñpüle.” pirkei nga.

Mülei nga kiñe fütä leufü. BíoBío pingei chi fütä leufü. Entonces fei pirkeingün. Fei pingei nga pu lonko, general, itrokom. “Ya, deu akuimün. Deu weni piwaiñ. Deu familia piutuwaiñ ta ti. Chumafuiñ kai? Iñche ta pilan ta ñi weungeal. Eimi ka pilaimi ta mi weungeal. Epüñpüle ta ti.” pirkeingün nga.

“Entonces, eimi, ya, repartiayu mapu. BíoBío, nometu BíoBío eimün ta mün mapu ngeai.” pirkei nga fütake che. “Fachi kai, fachi BíoBío iñchiñ ñi mapu che nga ñi mapu ngeai. Konpalayai winka.” pirkengün. “Eimün winka konpalayaimün. Weniyeuliñ weniyewaiñ. Pero kompalaaimün tüfachi mapu meu.” pirkei nga fütake lonko.

Fei mu nga firmarkeingün papel engün kafei. Fei nga “Pacificación” pitui nga pu winka. “Pacificación de Araucanía”.

Pero fei mu nga kiñeke ka, fütake lonko, eluulai. Eluulai. Fei nga deumalu nga ti “fundación” pirkelai ama winka, “pueblo”. Fei ta pu mapuche, müte nga ayilai felen nga ti “convenio” pilai ama pu winka. “Koilatupelaingün ta tüfa winka. Ka antü ‘Chuntepu rume, itrokom ñi mapu iñche ngeai.’ pipelaingün tüfachi pu winka” pirkei nga kiñeke lonko.”

Fei mu nga weluke weichatui reke ta pu mapuche. Rume fütä dungu mu ta rupai ta mapuche.

Fantepu pichike che, weke kona, ka domo, ülchake domo müte kimlai ta historia. Historia pi ti winka. Fei ta kimtukuniele itrokompile, kiñeutuafui ta mapuche, müntutuafui ti mapu.

Feula fantepu rume escasongei ta mapu. Familia ta umentalei ka tripan-tu. Todo itrokom tripan-tu. Mülei nga wecheke wentru, domo. Mülei familia. Mapu mületui fantepu rume pichin mapu. Trafwelai nga che küdawal. Ngelai nga mapu ta ñi küdawal, tukukaal, ka ta ñi ngülümäl kullin. Kachu ngewelai.

### < Testimonio 3 > Chumngechi ta ñi femün Antonio Millalén ñi pu che “Pacificación” meu

“Fei mu ta iñche ta kimtukunien ta dungu. Fei mu ta kimtukunien ta ti.” pikefeneu ñi fütä kuku, chacha. Fantepu nga doi tüngüi ta mapu, doi anütui

mapu, doi kúmekaletuiñ, doi pichike trokitueiñmu ta pu winka.

Iñche ñi fúta lonko, fei nga “Weichaiñ pu winka mu.” dijo. “Fütake winka fei nga weungelu engün, ngürüngürü inafiñ.” decía. “Ngürüngürü inafiñ.” pieneu. Fúta fei pikefui ñi abuelo. Ngürüngürü inai nagwe, kawellu mu ka.

Cuando vencían una batalla, entonces arrancaban los guerreros winkas. Porque los mapuches también eran astutos pa’ pelear. Después de tanto pelear éstos se pusieron muy astutos. Astutos pa’ pelar. Y llükalafingün winka.

Y “Winka nga lanza mu nga inafiñ.” pi ... Mollfüñ pi am ta fochüdükefuingün ta ti, los antiguos. Tomban la sangre de los winkas, calentito, con eso se alimentaba. Si no tenían, no tenían cómo refugiarse, el alimento, todo. Mejor, mollfüñ mu fill. Winka nga chi, fei mu nga “Lanza mu ka chemfiñ”, “fei fochüdmafiñ mollfüñ.” pi. “Fei mu nga doi newentuiñ ta ti, llükatulafiñ. Rume fütake dungu mu nga rupaiñ.” fei pikefeneu ñi fúta kuku yem. (...)

“Fei kúpaiñ, iñchiñ nga tuwiñ Perquenco. Mülekefui nga ñi familia.” pi, Millalén.

Fei nga akulu winka tüfa mu nga ngelai. Aquí estaba too vacío esto pa’ca. Montes habían. No había ná. Fundo, escuela, ni una cosa.

Siempre los antiguos, los caciques andaban trayendo gente. No andaban solos sino que andaban con un grupito de organizao. Porque había que defenderse. Lo obedecían porque había que defenderse. Puede morir, o puede vivir. Vencer o morir. Entraba en grupo. Hombre y mujer. Dice que no podían hacer fuego tampoco. Era too montaña. Montaña oscura toa esta parte. Quila<sup>17</sup> u otra. Lleno.

Primero, cuando hizo unos weichan ahí, cuando se venían acercando los winkas, ya, entonces el abuelo sacó su gente con su, como ejército, un grupo. Se fueron ganar allá en ..., aonde está el General López, aonde está Arquenco. Así decía la abuelita. “Arquenco estuvimos.” Ahí se posentaron.

Y después ya empezaron a trazar esa cuestión de “la línea” pa’llá. Entonces se vinieron por esta parte. Andaban buscando aonde podían establecerse pa’ siempre. Y después se vinieron aquí. Y entonces ahí vino, es una radicación que se llama “Comisión Radicaora”.<sup>18</sup> Aquí le tocó. Aquí en esta parte le tocó

la comunidad Antonio Millalén Calbuco. A él le tocó la radicación.

Mi abuelo lo buscaban pa' prisionarlo. El abuelo dice que se fue para Argentina. A Argentina se fue, se corrió para Argentina. Y después volvió, pu. Aquí se estableció. Ya se pacificó más. Le dieron derecho pa' que vivieran, no lo atropellaran más. Küpatui. Fantepu lapatui tüfachi pichi mapu meu. Tüfachi mapu mu müleñ ta ti. Y lapatui, fei elngetui ta, eltun mu müleñ ta ti.

<証言1> いかにスペイン人たちがやって来たか（「征服」）



写真：自宅で伝承を語るフランシスコ

昔のことだが、まだその「エスパニョール（スペイン人）」というウインカたちがやってくる前、ここ、この地ではな、今ではチリと呼ばれておるが、偉大なロンコ（地区の首長）たちがおった。ロンコがな。それで、ロンコたちは（事あるごとに）集まっておったのだ。それでな、ウインカたち、よそ者がやって来ることをすでに知っていたそうだ。「よそ者」という奴らがな。

ウインカたちがやって来ることは、まだ知られていなかったのだ。かつて、偉大な人々はよそ者がやって来ることを知らなかった。

だが、彼らは夢を通じて察知しておったのだ。夢を通じ

てな。夢じゃ。夢でな、ウインカがやって来るということを察知しておった。昔のマプーチェはそうしたのだ。夢で見た。それで、「ウインカは、よそ者はもうやって来る。」と。で、「我々に戦いをしかけてくるだろう。」とも言っていたそうだ。

(マプーチェに)戦いをしかけたのだ。いい意図でやって来たのでもなかった。マプーチェに益をもたらすことはなかったのだ。アラウカーノともいわれるのだがな。で、そのものたちは益をもたらさなかった。で、(スペイン人は)彼ら(マプーチェ)に戦いをしかけたのだ。

それでな、また時には戦うのもいいことなのだよ。なぜなら、さもなくばもっと欺かれてしまうことになりかねないからと、わしらはいつも言っているのだ。もっと騙されることになってしまふところだともな。彼ら(スペイン人)はスペイン語を話すので、紙に(文字を)書いて、それで「ここにあなたの著名を書くように。互いに仲良くしよう。」などと言ったらだな、われわれは事をもっと悪く運んでしまふところだろうよ。

それでじゃ、先祖たちはな、集まって、それで話し合っただけで事を提案したのだ。それで、「ウインカはこんな風にやって来るだろう。奴らと戦った方がよからう。やれるところまでやろう。」と言ったそうだが、先祖たちはな。ラウタロやガルバリーノやカウポリカンや、そうした偉大なロンコたちもな。それで、スペイン人たちを恐れることもなかったのだ。恐れなどせずにな、それで戦ったのだよ。「やれるところまで、やろう。」と言ったのだらう。そうでなかったらな、今日われわれマプーチェがこの土地に存在することはなかったらう。われわれはいなかったらうよ。

偉大なマプーチェたちは死んでしまった。今でも思い出…。また中には、そんな風に今は亡き偉大なロンコたちが戦ったということを忘れてしまったマプーチェもおる。みんなもな、マプーチェが、女たちもこの事を、昔起こった出来事を、(ウインカとの)戦争の事を思い出しておればな、マプーチェはもっとしっかり団結しているはずなのだがな。今では、ウインカは我々のことをとてもひどく欺いておる。今では、この地での我々の生活はあまりよいものではないのだ。(以下略)

### <証言2> 「アラウカニーアの平定」

もちろん、その後でスペイン人がやって来て、つまり「征服」だが、とても長く…、350年もの間戦ったのだ、昔の人たちが、わしの父、祖母が話していたところではな。そんなにも長く戦い続けた後でな、結局スペイン人は決してマプーチェたちを納得させることはできなかった。敗れることに甘んじようとはしなかったのでな。(抵抗することは)時にはいいこと

なのだ。

それで幾度もの戦闘のあとでな、それでもう(彼らは)イエズス会の神父たちを連れて来たのだ、マプーチェたちを説得する手段としてな。それで(彼らが)言うには、「こうした方がよかろう。我々は長い間戦ってきた。ウインカもマプーチェも多くの者を失ってきた。我々は殺し合ってきた。それで、どうしようもなかろう。あんた方はもうあんたたちの土地のことを知り尽くしている。あんたたちは土地をこよなく愛している。だから戦ってきたのだ。だからあんたたちは戦ってきたのだ。」、そう偉大なウインカの将軍たちは言ったそうじゃ。「お互いに友人として扱った方がよかろう。お互いに家族のようにつき合おう。」と、そうも言ったそうじゃ。

そこで、偉大なロンコたちの中にはこう言うものがいたのだ。「よいのではなかろうか。もしそうすれば…。わしらはこれ以上このウインカどもを打ち負かすことはできぬだろうしな。(彼らは)鉄砲を持っておる。何でも持っているのだ。たくさんの者が死んだ。子供も女も皆がその戦闘で死んでしまったのだから。」と、偉大なロンコたちは言い合ったそうじゃ。

「事は早い方がいい。合意を結ぼうではないか。」と、ウインカたちは言ったそうじゃ。イエズス会の神父がやって来て、「あんた方が互いに殺し合い続けるのはよくない。もうこれで戦闘はやめた方がいい。」と。「(マプーチェに)娘たちがおるなら。」と、昔の将軍とか隊長とかマプーチェに戦いをしかけていた者たちが言ったそうだ。「あんた方は(屈服することに)甘んじようとはしない。」そう将軍は言ったそうだ。

マプーチェは負かされることに甘んじようとはしなかったのだ。「行きつくところまで行こうではないか。皆がこの戦いで死んでしまうことはあるまい。」と、そう偉大な人々は言ったそうだ。

「我々は永遠に戦うだろう。それで、我々は苦しむことになる。どうしようもなかろう。よし、このウインカたちと友好を結んだ方がよかろう。互いに家族のように扱った方がよかろう。」そう将軍<sup>15</sup>(「ロンコたち」?)は言ったそうじゃ。

だが、すべてのものが…。「よろしいのではないか。」と、そう言ったマプーチェもおった。それから中には「ウソをついているのではなかろうか。このウインカたちはいろいろな計略を持っておるそうだからな。我々が彼らを計略で打ち負かすことはできまい。」というマプーチェもな、そう祖先



たちは言ったそうじゃ。女たちもな。

「よろしい、どうしようもなかろう。このよそ者たちがやって来たのはグネチェン<sup>16</sup>の思し召しかもしれんしな。だからお前たちはうち破ることはできんじゃろう。今となつてはお互いに友人のように扱った方が、お互いに家族のように扱った方がよかろう。」と、偉大な人々は言ったそうじゃ。「わしには娘がおる。男子が、息子たちがおる。若い娘たちがおる。だが、その方がよかろう。」と、偉大な人々は言ったそうじゃ。「お互いにな、訪問し合つて、家族のようにつき合おう。」と、偉大な將軍たちは言ったという。

そういう次第で「平定」ということになったのだ、アラウカニーアのな。彼らは紙（文書）も残しておる。歴史も残しておる。歴史がある。大学は知っておる。これらの偉大な出来事をな。嘘ではない。本当のことなのだよ。

とても昔…、偉大な人々は350年間続け…、戦つたのだ、偉大な人々はな。負かされることはなかつた。負かされることはなかつたのじゃ。偉大なロンコたちはな、その後死んでしまった。皆な。それでいなくなったのだ…。

「それで、ロンコの娘、ロンコの息子たちを教育しようではないか。いたずらに大学とかそうしたものがあるわけではない。」と、そう偉大な將軍たちは言ったそうじゃ。イエズス会の神父たちがおつてな。

だが彼らは続けなかつた。（土地を）守るものはいなかつたのだ。偉大な人々は皆死んでしまった。若いものたちはな、あまり信じようとはしなかつた。それで、今では来てしまった、やって来たのだ、ウインカがな。

「それならばだ…」と、偉大な人々は言ったそうじゃ。「よかろう。土地を分けることにした方がよかろう。あんたたちももうやって来てしまったことだし。どうしようもなかろう。我々は戦つた。我々は殺し合つた、お互いにな。」と、偉大な人々は言ったそうじゃ。

ある大きな川がある。ビオビオ川という、その大きな川はな。それで、こう言ったそうじゃ。こう言ったのじゃ、主立つた者たちや將軍など、皆の者にな。「もう、もうあんた方はやって来てしまった。これからは友と呼び合うことにしよう。これからは家族と呼び合うことにしよう。他に仕方なかろう。わしは負かされることをよしとしない。あんたも負けることをよしとしない。お互いにな。」、そう言ったそうじゃ。

「それでは、あんた、な、これからは土地を分けることによろ。ビオビオ

川の、ビオビオ川の向こうはあんたたちの土地ということにしよう。」と、そう偉大な人々は言ったそうじゃ。「でこちら側、ビオビオ川のこちら側はわしらマプーチェの土地だということにしよう。ウインカはこっちの方には入ってこないように。」、そう言ったそうじゃ。「あんたらウインカはこっち側には入らぬこと。互いに友人としてつき合うというのならば、友人同士になろう。でも、あんたらはこっちの土地には入って来んようになる。」と、そう偉大なロンコたちは言ったそうじゃ。

それで、彼らは紙に著名もしたそうじゃ。それをウインカたちは「平定」と呼んだのだ。「アラウカニーアの平定」とな。

だがそれでな、中にはな、やはり昔のロンコの中には(和平に)甘んじようとせぬ者もいた。甘んじなかったのだ。それで、「設立」とウインカたちは言うそうではないかのう、「集落」じゃな、それがもう建てられてしまった。それで、マプーチェたちはあまり気に入らなくてな、その、ウインカは「合意」と言うのではないかのう、そのためにそんな有様になっていることをな。「この者は、ウインカは嘘をついたのではないか。そのうちに、『いくらでも、全ての土地を自分のものにしよう。』などと言うつもりではないだろうか、このウインカどもは。」と言うロンコたちもいたそうじゃ。

それで、いろいろな場所で戦いを再開したというようなわけだ、マプーチェたちはな。とても偉大な事を経験したのじゃよ、マプーチェはな。

今では子供たち、若者たち、そして女たち、娘たちはあまり歴史を知らん。「歴史」という言い方をウインカはする。それで、あらゆる場所で(歴史を)知るようになれば、マプーチェは団結して、土地を奪い返すことができるはずなのじゃがな。

今は、今ではな、土地がとても不足しとる。年ごとに家族の数は増えてゆく。全て、年を追うごとにな。若者も女もおる。家族もおる。土地はな、今では土地はとても少なくなってしまった。もうそこで働こうにも人が入る余裕もない。耕すための、作物を植えるための、そして動物を育てるための土地はない。草木もなくなってしまったのだ。

### <証言3> 「平定」期におけるアントニオ・ミジャレン一族の動勢

そういうわけでわしは次第を知っている。そういうわけでわしは知って

いるのだよ、と偉大なわしの父方祖母は、親父はわしに言っておった。今ではより事態は落ち着いて、状況は安定して、われわれの生活はもっとよくなり、ウインカたちもわしらのことを少しばかりよく扱うようになった。

わしんとこの偉大なロンコ、その者はウインカたちに戦いをしかけたと言った。「手強いウインカたちをうち破ると、わしらはキツネのごとくその後を追ったのだ。」と言っておった。「わしらはキツネのように後を追った」とわしに言っておった。わしのじいさんはよくそう言っておった。キツネのように下の方に追って行ったのだ、馬にも乗ってな。

戦いに勝つとな、するとウインカの兵士たちが逃げて行くわけだ。というのは、マプーチェたちも戦闘に長けておったからな。あんまりにも長く戦ってきたので、とても巧妙になったのだ。戦い方が巧妙にな。それで、ウインカを怖がらなかつたのだよ。

で、「わしらは槍を持ってウインカを追いかけたのだよ。」と言って…。血をな、奴らの血を吸って飲んだそうじゃ、昔の人たちはな。ウインカの血、あたたかいやつをな、それを飲んで、それで腹の足しにしていたのだ。なにしろなかつたのだから、なかつたのだからな、寒さをしのぐ術も食糧も何もな。血でも何でも飲んだ方がいいと。ウインカをな、それで、「わしらは槍も使って何をした、それで奴らの血を吸っていたのだ。」と言っておった。「そうするとわしらはもっと力がみなぎって、奴らを恐れんようになった。わしらはとても大きな出来事を経験したのだよ。」と、今は亡き偉大なわしの父方祖母はわしに言っておった。(中略)

「それで我々はやって来た、我々の出身地はペルケンコじゃ。(そこに)わしの家族は住んでいた。」と、言っておった、ミジャレン一族はな。

それで、ウインカがやって来たときには何もなかつた。ここは全くの原野だった、ここよりこっち側はな。山があっただけじゃ。何もなかつた。フンド(大農場)も学校も、何もな。

いつも昔の人たちは、カシーケ(地区首長)たちは勢を引き連れておった。自分たちだけではおらず、武装した一隊を引き連れていたのだ。というのは、自衛せねばならんかつたからじゃ。(彼らは)カシーケに従っていた、自衛しなければならんかつたからな。死ぬかもしれんし、生き残るかもしれん。勝利か死かじゃ。集団で行動していたのだ。男も女もな。火

を焚くことも出来なかったそうじゃ。辺り一帯は山でな。薄暗い山だったと、ここいら一帯はな。キラ<sup>17</sup>やら何やらが生えていてな。一杯だったのだ。

最初に、あそこで幾度か戦闘をやったとき、ウインカたちが近づいて来た時に、な、それでじいさんは自分の一族を、自分の、軍隊みたいなもの、一隊とともに連れ出したのだ。あちらの方…今ロベス將軍駅のあるところ、アルケンコ駅のあるところに進出して行ったのだと。そのようにばあさんは言っておった。「アルケンコにわしらはおった。」と。そこに居を構えたのだと。

で、その後(チリ軍側は)もう例の、「(軍事)境界線」というやつをあちらの方面(アルケンコ)で引き始めた。それで、こちらの方(ラウタロ)にやって来たのだ。永住できるところを求めて移動していた。で、その後ここにやって来たのだ。で、そういうわけでそこにやって来たのが定住、「定住委員会」<sup>18</sup>というやつじゃ。じいさんにはこの地が割り当てられたのじゃ。この地で、アントニオ・ミジャレン・カルブーコ共同体が割り当てられたというわけじゃ。じいさんに定住(共同体)が割り当てられたのだ。

わしのじいさんを投獄しようと、奴らは探し回っておった。(それで)じいさんは、アルゼンチンへ行ってしまったという。アルゼンチンへ行ってしまった、アルゼンチンの方へ逃げたと。で、その後で戻ってきたのじゃ、な。ここに腰を落ち着いたのだ。もう状況はもっと落ち着いた。じいさんは生活できるという、もう侵害されないという権利を与えられた。戻ってきた。それで、この小さな土地で亡くなったというわけだ。(それで)われわれはこの地に住んでおる。で、じいさんは亡くなって、それで埋葬され、墓地の中におるのだよ。

## 5. 注

1. 「平定」以前の時期のイスパノ・クリオーリョ社会とマプーチェ社会の交流については、Villalobos y otros [1982], Villalobos y otros [1989], León [1990] 参照。

2. 「アラウカニーアの平定」の過程については、Guevara [1998], Bengoa [1987]: 133-325. が詳しい。また、「平定」や移民によるアラウカニーアの

植民をめぐる共和国側の法制の変遷とその問題点については, Aylwin [1996] 参照。

3. 「平定」後のマプーチェ社会の経済状況については, Bengoa [1984] 参照。

4. この問題については, 千葉(b) [1997]: 196-199. 参照。

5. 同様の主旨で出版した証言としては, 千葉(a) [1997], 千葉 [1999] がある。

6. マプーチェ社会における「夢」の重要性については, 千葉 [1997](b): 207-213. 参照。

7. この3名の名は, 同時代のスペイン人で征服に参加したエルシージャが出版した不朽の叙事詩「ラ・アラウカーナ(第1部, 1569年初版)」に登場して以来, ヨーロッパでも知れ渡った。彼らは今日のチリでも小学校の歴史の教科書等にも「侵略者に抵抗した英雄」として描かれ, 一般のチリ人にもよく知られている。(Ercilla [1970])

8. 代表的な研究としては, Villalobos y otros [1982], [1989] が挙げられる。

9. 「キジンの和平」については, Rosales [1989] tomo II: 1127-1140. 参照。なお, フランシスコが1996年に行った証言の中には, キジンの地名に言及しつつほぼ同様の内容をスペイン語で語った部分が含まれている。(Millalén [1996])

10. 同様の認識は, 別稿で取り上げたラウタロ区の別の共同体に住むマプーチェ男性の証言の中でも観察された。千葉 [1997](a): 97-99, 106-108. 参照。

11. 「平定」後の早い時期に各地のマプーチェたちの証言を編纂した貴重な資料に, トマス・ゲバラの「最後のアラウカーノの家族たちとアラウカーノの習慣 (1913)」があるが, この資料にもミジャレン家に関する証言は含まれていない。(Guevara [1913])

12. Guevara [1998]: 34, 40, 48, 49, 67, 82, 86, 93, 152, 181. 参照。

13. 17世紀のあるスペイン人捕虜の記録には, マプーチェたちが戦勝儀礼の場で, 捕虜にした敵の心臓を取り出して血をすすったのち, これを切り刻んで戦士たちが食べるという習慣が描かれている。(Pineda y Bascuñán [1989]:41.)この行為は単なる「人肉食」ではなく, 敵の勇敢さを自分たちの

体内に導入するという儀礼的意味を備えていた。

14. 1870年にはペルケンコのモントリー族の所領に共和国軍の攻撃が加えられ、一族は南方に位置するカウティン川を超えて避難している。(Guevara [1998]: 86.)

15. 「將軍」文脈から、「ロンコたち」の間違いと判断される。

16. 「グネチェン Ngünechen」 「人を操る存在」という意味の現代マプーチェの民族神。この名称が記録に登場するのは「平定」後の今世紀の初頭であり、布教活動を通じキリスト教の唯一神的概念がマプーチェに浸透して発生したものと思われる。

17. 「キラ quila」 チリ南部原産のイネ科の植物。マプーチェ語本来の発音は“küla”。

18. 「定住委員会 Comisión Radicadora」 「平定」完了後、各地のマプーチェの土地占有状況を調査し、少数の家族ごとに共同体として土地所有権を付与した国家機関。

## 6. 謝辞 (Mañumün)

Rume mañumafiñ don Francisco Millalén ta ñi eluetu meu tüfachi kimün. Ka mañumafiñ don Santiago Millalén, don Francisco ñi peñi, ta ñi küme duam meu kimniefiñ ta ñi peñi. Ka chaeltun piafiñ ta ñi wentüi don Hilario Huirilef ta ñi kelluetu meu ta ñi küme elafiel tüfachi kimün.

この証言を与えてくれたフランシスコ・ミジャレンさんに大いに感謝します。また、フランシスコさんの弟であるサンティアゴ・ミジャレンさんにも感謝します。私はサンティアゴさんの好意でフランシスコさんに知り合えたのですから。そして、この証言を正しい形で残すために助力してくれたイラリオ・ウィリレフさんにも感謝します。

## 7. 参考資料

### (1) 音声資料

Millalén Francisco, *Testimonio*, Comunidad Antonio Millalén, Comuna de

Lautaro, No.1: 3 de agosto de 1996, No.2: 3 de septiembre de 1999.

(2) 文献資料

Aylwin, José, *Estudio sobre tierras indígenas de la Araucanía: antecedentes histórico-legislativos (1850-1920)*, Serie Documentos No.3, Temuco, Instituto de Estudios Indígenas, Universidad de La Frontera, 1996.

Bengoa, José, *Historia del pueblo mapuche*, Santiago de Chile, Ediciones Sur, 1987, 2ª edición.

Bengoa, J. y Valenzuela, E., *Economía Mapuche. Pobreza y subsistencia en la sociedad mapuche contemporánea*, Santiago de Chile, PAS, 1984.

千葉泉 (a), 「マプーチェ歴史伝承, ラウタロ区 (1) —フアン・コネヘーロの語る「征服」と「平定」—」, *Estudios Hispánicos*, No22.所収, 大阪外国語大学スペイン・イスパノアメリカ研究室, 1997年, 95-112頁。

千葉泉 (b), 「『マチ』と夢と銀細工—チリ先住民伝統医療師の現状—」『大阪外国語大学論集』第17号所収, 1997年, 203-230頁。

千葉泉, 「マプーチェ歴史伝承, チョルチョコル地区 (1) —ロサ・バーラ・カユルの語る「平定」—」, 『大阪外国語大学論集』第21号所収, 1999年, 193-215頁。

Ercilla, Alonso de, *La Araucana*, Santiago de Chile, Editorial del Pacífico A.A., 1970.

Guevara, Tomás, *Ocupación de la Araucanía*, Santiago de Chile, Andujar, 1998.

Guevara, Tomás, *Las últimas familias araucanas i costumbres araucanas*, Santiago de Chile, Imprenta Litografía i Encuadernación "Barcelona", 1913.

León, Leonardo, *Maloqueros y conchavadores en Araucanía y las pampas, 1700-1800*, Temuco, Ediciones Universidad de la Frontera, 1990.

Pineda y Bascuñán, Francisco Núñez de, *Cautiverio Feliz*, Santiago de Chile, Editorial Universitaria, 1989.

Rosales, Diego de, *Historia General del Reino de Chile, Flandes Indiano, Santiago de Chile*, Editorial Andrés Bello, tomo II, 1989.

Villalobos, Sergio y otros, *Relaciones fronterizas en la Araucanía*, Ediciones Pontificia Universidad Católica de Chile, Santiago de Chile, 1982.

Villalobos, Sergio y otros, *Araucanía: Temas de Historia Fronteriza*, Temuco, Ediciones Universidad de La Frontera, 1989.